

# 新たなコミュニティの 形成によるまちづくり

科学コミュニケーター  
本田 隆行

# 新たなコミュニティの 形成によるまちづくりに向けて

科学コミュニケーター  
本田 隆行

# 事前ワークショップ

## 2/22@浪江町いこいの村なみえ

### 目的

環境動態研究の成果と今後解決すべき課題を整理し、専門家（環境動態研究者やまちづくり・社会科学者等）と自治体職員により、**研究成果をどのようにまちづくりに役立てられるか、研究から得られた知見をどのように発信すべきか**について議論し、今後の方向性を明らかにする。

# 参加者

**約50名**（1グループ最大10名＊5グループ）

- まちづくり・社会科学者；約5名
- データベース、コミュニケーション；約10名
- 自治体；約15名
- 環境動態研究者；約10名  
F-REI、NIES、JAEA、福島県、福島大、弘前大、  
森林総研、AIST等
- 大学生；約5名
- F-REI関係役職員；約5名

# 主な論点

F-REI (第5分野研究開発チーム)

まちづくりに向けた  
課題への取組

被災地域のウェルビーイングの確保・向上

住民との  
コミュニケーションと  
新たなコミュニティ  
の形成

原子力災害に関わるデータ・知見の集積・発信

社会科学・まちづくり

産業化の多様性  
(経済回復)

地域連携による  
適応型都市計画

新たなコミュニティ  
形成 (地域の回復力)

技術イノベーション  
(分野間連携)

地域住民との双方向  
コミュニケーション

環境動態研究・健康調査

長期環境動態  
モニタリング

人間活動影響/移行  
抑制対策の評価

健康・メンタル  
ヘルス調査

住民の懸念  
や不安に応える  
取組

人材育成

施策・防災提案

国際協力

論点	細目（例）	
<b>【論点①】</b> <b>まちづくりに</b> <b>向けた課題</b> <b>への取組</b>	<b>産業化の多様性</b> <b>（経済回復）</b>	地域の生業、地場産業、伝統産業の回復 新産業の開発・創造
	<b>地域連携による適応</b> <b>型都市計画</b>	帰還住民と新たな住民が連携した計画づくり パッチワーク的土地利用変遷のモニタリングと課題解決手法の提示
	<b>技術イノベーション</b> <b>（分野間連携）</b>	林業、農業の効率化（担い手不足への対処） 暮らしの改善（高齢化、独居老人への対処）
	<b>【論点②】</b> <b>住民とのコ</b> <b>ミュニケー</b> <b>ションと新た</b> <b>なコミュ</b> <b>ニティの形成</b>	<b>地域住民との双方向</b> <b>コミュニケーション</b>
<b>新たなコミュニティ形</b> <b>成（地域の回復</b> <b>力）</b>		帰還住民と新たな住民との連携・協力 新たなコミュニティの形成による自律的な地域社会の回復
<b>原子力災害に関わる</b> <b>データ・知見の集積・</b> <b>発信</b>		環境動態に係るデータ・知見 社会科学・まちづくりに係るデータ・知見
<b>【論点③】</b> <b>生業の再生</b> <b>や住民の安</b> <b>心を得る取</b> <b>組</b>		<b>長期環境動態モニタ</b> <b>リング</b>
	<b>人間活動影響/移行</b> <b>抑制対策の評価</b>	森林、市街地等における人間活動影響の評価 移行抑制対策の提案と効果、実現性の評価
	<b>健康・メンタルヘルス</b> <b>調査</b>	被ばく調査・評価 放射線への判断力

## 論点①

まちづくりに向けた課題への取組

# 行政の枠を超えた連携の必要性

- 浜通り地域のまちづくりにおいて、広域的な連携は中長期的な課題。
- 町同士の横串しを通すような役割があっても良いのではないか。
- より積極的に広域連携を図るためには、自治体の枠組みを超えた繋がりを有する移住者コミュニティ（民間の力）の活用が有効かもしれない。

# F-REIの存在

- 周辺に教育機関・施設も整備することで、外国人を含めたF-REI関係者家族の居住促進を図る。それにより、地域の教育水準を高めることで更なる移住促進を目指す（つくばモデルの構築）。
- F-REIそのものが地域の拠点となること。地域に開けたF-REIを作ることで、地域の生業や地場産業の振興に寄与する。
- 企業訪問などを行っているが、F-REIには何が出来るのか、何をお願いしてよいのかを先方が分からない。コミュニケーションを円滑に行うことは課題。
- 住民を巻き込むには「F-REIは〇〇をやっています」と、言えるようにしなければ。

## 論点②

住民とのコミュニケーションと  
新たなコミュニティの形成

## 研究者とのコミュニケーション

- 研究者 = 移住者であり、地域のイベント等への参加等、元々の住民と積極的に関わるようなマインドが必要。
- 研究者が使う言語は、住民とコミュニケーションする際に噛み合わないことが往々にしてある。その溝を修正する場や、埋める努力が必要。
- 研究者のシーズと住民のニーズの合致点を図るため、住民と研究者をつなげられるような専門集団が必要。

## 現在～将来に向けた地域貢献

- 放射線リスクに対するリテラシーを身に付けることによって、自身のみならず家族への波及効果が見込まれ、安全安心の醸成が図られるのでは。地域貢献の観点からF-REIの積極的な関与が望まれる。
- 長期的な観点から、若年層を対象とした放射線教育の充実が必要。
- 「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」においては、事故対応を検証することで、同じことが繰り返されないように対外的な発信を行うことが重要。

## 論点③

生業の再生や  
住民の安心を得る取組

## 安心に向けた、安全の提示

- 農業再生・振興に取り組む人たちに向けた、地域ぐるみの積極的な支援が必要。F-REIは、放射性物質の環境動態評価に関する実証的研究を、地域と協働して進めるべき。
- 福島県の方は放射線についてとても勉強しているが、安心のラインはそれぞれで異なっている。
- 自己決定できることが大切。そのために、研究者と住民の対話による信頼感の醸成を目指すべき。

さて。

**“土地の良さ”**

**“人の良さ”**

**心象に基づく“地域観”**

**どこまで残す？**

**心象に基づく“地域観”**

**どこまで変える？**

**どこまで残す？**

関わる人 訪れる人 移住する人

心象に基づく“地域観”

住んでいた人 住んでいる人

**どこまで変える？**

**誰が、どんな立場で、**

**どのようなコミュニケーションを担う？**

# 新たなコミュニティの 形成によるまちづくりに向けて

科学コミュニケーター  
本田 隆行